

はじめに

自然系博物館の発祥は「蔵機能」から始まったといわれます。自然に関する事象を調べ、分類整理し、更に調査を継続するためには、その資料（モノ）を蓄え、常にそこにフィードバックしながら進んでいく必要があるからです。

特に、当館のように県で唯一の自然系博物館であり、しかも創立してから数年という歴史の浅い博物館では、総合的な自然誌調査とその成果の蓄積は不可欠です。資料そのもの（1次資料）は勿論、それに関わる資料（2次資料）も丹念に残していったこそ、移り変わる自然誌の態様を正確に捉えることができるのです。

「総合調査」は、茨城県全域を、地誌等を参考にして4地域に分け、各地域を3カ年ずつ調査し、これを繰り返しながら茨城県の自然の全容を明らかにしようとするものです。

これは地方自然系博物館としての当館の存立基盤をなし、その蔵機能は当館博物館活動全体の根源をなすものといってよいでしょう。すべての教育活動も学習支援活動もここを起点として成立するものだからです。

しかし、自然を対象とする調査研究は長い時間と綿密な計画、そして膨大なエネルギーを必要とし、今回の第2次総合調査でようやく計画の半分に到達することができたに過ぎません。

幸い、第1次調査に引き続き今回も県内研究者をはじめ多数の研究者の参加を得ることができました。地域における研究は、研究成果そのものの重要性もさることながら、研究者のネットを構築することはとても大切です。

成果としての、この報告集が広く活用され、ネットがさらに拡大発展していくことを願ってやみません。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館
館長 中川志郎